
誰も知らない新しい私

芝山 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰も知らない新しい私

【Nコード】

N9088Y

【作者名】

芝山 玲

【あらすじ】

企画競作 お題「ビフォーアフター」

親の離婚をきっかけに私は名前も変わって、私のことを知る人がいないところで一からやり直す。いままでの自分とはさよならして新しい私になる。その希望と期待で一杯だったのに私を知っている人と出会ってしまった。

(前書き)

企画競作 お題「ビフォーアフター」

親の離婚をきっかけに名前が変わる、住むところが変わる。だから私はいままでの私じゃなくなりたいと願っていた私に生まれ変わるはずだった。

ご都合主義的恋愛風味が入っていますが主題は恋愛ではないと思うので「その他」で投稿します。

人はそうそう変われない。

いろんなもののがんじがらめになっているから。

私という人間は誰かのイメージの集合体。お父さんの知っている私、お母さんが思っている私、先生に期待されている私、友達に都合の良い私。

ちよつとトロくさくて、要領があまりよくなくて、中途半端に真面目で、おとなしい。お父さんが仕事から帰ってくる時間までに宿題が終わらない。お母さんの手伝いもできない。お父さんには寝るのが遅いと怒られて、どうにかやっていった宿題のノートは翌朝友達に『写させてね』と持って行かれて授業が始まるぎりぎりにならないと戻ってこない。

授業中であてられると慌ててしまつて答えられない。声も小さくて先生に苦笑される。でもテストの点数は悪くないし、係の仕事も真面目にやるから先生に嫌われたりはしない。

一度そういうポジションになつてしまつたらよほどのことがないと抜け出せない。

環境が変われば、なんて言うけど小学校から中学校へはほとんど持ち上がりだ。周りの顔は変わらない。私に対するイメージは変わらない。

中学校から高校だつたら大丈夫なんだろうか。同じ中学から同じ高校へ進学するのは多くないはず。それでもゼロとは言えない。もし私を知っている人がいたら、また私のイメージはそこで固まる。学校だけじゃない。

地域だつてそうだ。どこそこのおうちのお嬢ちゃん、あそこの家のお兄ちゃん、そんな呼び方でしか認識されていなくても誰かが私を知っている。知っていて、知らない部分まで想像して、こういう子だと決めつける。お母さんが漏らす私の日常、その家の子が面白

可笑しく話す学校でのエピソードで、私という人間は決められてしまう。

おとなしくて真面目な子。

目立たない子。

一生そのままだと思ってた。

新しい制服は徹夜で手を入れた。指先を何度も針で突いたけどスカートの裾は短くできた。やりすぎはまずいと思ったからブラウスは学校指定の物のままだけど、一番上のボタンだけは外してある。化粧は朝ファンデを塗ったら塗りすぎたらしくて顔が真っ白になったから慌てて落とした。やり直すには時間がなかったから日焼け止めだけにして、あとは眉を描いてグロスを塗った。多分、変じゃないと思う。

教室に並ぶ顔はていどの差はあれど興味津々といったいで教壇に立つ私を見ている。

最初が肝心だ。

何度も各務の前で練習した、親しみやすそうな明るい笑顔を浮かべる。

「田口真美です。よろしくお願いします！」

お父さんとお母さんは離婚した。

中学生だった私はお父さんとお母さんのどちらをとってもいいと言われた。

私はお母さんをとった。それは別にお父さんがとてもじゃないけど育児なんてできそうにないからなんて理由じゃない。お母さんについていったら苗字が変わるから、だった。

離婚を機にお母さんは旧姓に戻して実家に戻ることになった。といつてもお祖父ちゃんとお祖母ちゃんが住むその家に一緒に住むわけにはいかなかったから、近くにアパートを借りた。

お母さんは正社員の仕事を探した。残念なことにパート待遇の仕事しか見つからなかったけどフルタイムで働けるから月収としてはそう悪くないのだ、とお母さんは笑った。

朝早くから夜遅くまでお母さんはうちにいない。

お母さんの思っていた私がもういなくても、お母さんは気付かない。

「田口さん、放課後ひまかな？」

声をかけてくれたのは同じクラスの女の子だ。さすがに転校初日でクラス全員の名前なんて覚えられない。でも休み時間に最初に声をかけてくれた人だからこの人は覚えてる。

「辻本さん」

「もう名前覚えてくれたの？」

辻本さんは嬉しそうに笑った。辻本さんの両隣にいる子たちが、私は？ と身を乗り出してくる。

私は頬をひきつらせないように気をつけながら笑った。

「真田さんと副島さん、だよね」

「当たり前！ 田口さんすごい！」

えへへ、と照れたように笑ってみる。

ここは以前住んでいたところとは違う。誰も私のことを知らない。私という人間はこれから作られる。だから私さえ気をつければ、私はなりたい私になれる。

「あのね、親睦を深めるためにカラオケ行きませんか？」

丁寧な口調で、でもおどけたように言いながら辻本さんは体を少し避けた。一緒に行こうと言うのだからうクラスの子がその後ろから

私を窺うように笑顔を見せる。

「喜んで！」

友達とカラオケになんて行ったこともないくせに私は笑顔で頷いた。

このクラスは男子と女子の仲が良いらしい。もう終わってしまったけれど体育祭での団結力は学校一だったんだそうだ。残念ながら結果は伴わなかったらしいけど。

そのせいか、こうして男女取り混ぜてカラオケにやってきてパーティールームで大騒ぎというのも特別珍しいことではないんだそうだ。

「田口さん、前の学校ではなんて呼ばれてた？」

「真美って名前で呼ばれてたよ」

啜っていたストローを離して言うと、じゃあ私も真美って呼ぶね、と微笑まれる。だから私のことも香奈って呼んでね、と言ってくれる。

うん、と頷くと他の子も、私も苗字じゃなくあだ名で、と言ってくる。

一度に覚えられるかな、とへらへら笑いながら携帯電話を取り出す。

前は必要なかった物だ。どうしても、とねだってお母さんに買ってもらった。

「アドレス、教えてくれる？」

「もちろん。赤外線、いい？」

あつという間にその輪が広がる。男子ともやりとりをした。びっくりしたのは男子も女子のあだ名や下の名前を呼び捨てにしているし、女子も男子の下の名前を呼んでいたこと。

付き合っているわけでもなんでもないので、みんなそうやって気

安く呼び合っている。

男子だとか女子だとか区別が無いみたいに。

男子に真美って呼び捨てにされるのは心臓に悪かった。

なんか勘違いしそうで。

なんでもない、って顔をして、相手が男子だろうと女子だろうと態度を変えずに返事をする事に慣れる日はくるんだろうか。

でもここで頑張れば私は変わる。

だってみんな私のことを知らないんだもの。

カラオケボックスを出たのは午後七時過ぎだった。すでに真っ暗だ。

面倒だから夕ご飯を食べていく、とファストフード店へ入っていてグループもいれば、これから塾だ、と驚愕の事実を告げて去っていく人もいる。

このあたりに不案内な私を気遣って、学校まで一緒に行こう、と言ってくれた人もいた。ありがたく一緒に学校まで戻る。そこからなら一人でも家に帰れる。

校門の前で誘ってくれた辻本さん 香奈とも別れた。

「じゃあね！ また明日ね！」

「じゃあねー！」

元気な明るい声と、大げさな手を振るアクション。

乗り切った。

私は今日を乗り切った。

疲れてるけどこれは達成感だ。私は変わる。

そう思ってそっとため息をついた。その瞬間だった。

「笹岡だろ？」

びくり、と肩が跳ねてしまった。

おそろおそろ振り返る。

「え、と。オカケン……？」

確かそう呼ばれていた男子だ。岡島謙一だったか。

ばさばさと無造作な前髪がメガネの前にも落ちていて、その見えにくいんだらう隙間から外を見ているからかやたらと目つきが悪い。なんで。

「笹岡だよな、あんた」

オカケンは一歩近づいた。砂を踏む、じゃり、という音がやけに大きく聞こえる。

なんでこの人、私の名前を、お父さんとお母さんが離婚する前の名前を知ってるの？

まず思いついたのは、オカケンの家がお祖父ちゃんちの近くだったことだった。

お祖父ちゃんの家には小さい頃に何度も来ている。夏休みや冬休みにお母さんに連れられて来ては一週間から十日くらい泊まっていた。お祖父ちゃんやお祖母ちゃんは優しいけれど遊び相手にはならない。私は近所の子供たちの仲間に入れてもらって遊んでいた。やつぱりトロくさくて、走るのも遅かったし隠れる場所もしらないから鬼ごっこもかくれんぼも上手にできなかつたけど、みんないやがらずに遊んでくれていた。

もしかしてオカケンはその中にいた一人だろうか。

「違う」

それをひと言で否定してまた一歩オカケンが近づく。

じゃり、と音がする。

私が一歩下がった音だ。

「じゃあ……」

記憶を探る。

誰だ。

「思い出せないかな」

オカケンが近づくとたびに私ができる。
とうとう背中が校門に貼り付いた。

「これならどう？」

オカケンはメガネを取って、前髪を持ち上げ額を露出させた。

街灯のあかりはその顔をしっかりと見せてくれない。それでも
脳裏に何かが閃いた。

「あんた……！ 遠野！？」

オカケン 遠野は、にっ、と笑った。

血の気が、引いた。

遠野謙一は小学校一年の頃からずっと同じクラスだった男子だ。

席が隣になったり、隣にはなくなっても同じ班になる回数が多くて、
クラスでは目立たないポジションの私がまともに喋れる相手の一人
だった。

教科書を忘れた遠野にみせてやったり、私の落とした消しゴムを
何も言わずに拾ってくれたり、給食の時間には苦手な牛乳をこっそ
り飲んでくれたりした。

優しい彼を好きになるのに時間はかからなかった。多分彼は私の
初恋だ。

でも四年の二学期、遠野は転校していった。

「遠くに行くんだ」

丸坊主、ではないけれどいがくり頭の遠野はそう言って、にかっ、
と笑った。

「元気でな」

「遠野くんも」

それが精一杯だった。

仲が良いつもりだったのに遠野の転校を知ったのは先生が言って

から。つまりみんなと同じタイミングだった。遠野から直接聞いたわけではなかった。

そして遠野は遠くに行くとしか言ってくれなかった。

どこへ引越すのか、せめて住所を教えてくださいれば手紙の一つも出せたのに、そのくらいの友情はあると思っていたのに、何一つ教えてもらえなかった。

好きだなんて伝えられるはずも無かった。私は遠野の友達でさえなかった。

私は 誰とも話せなくなった。

だってそうだろう。

仲良くなっても離れてしまうときは一瞬だ。ぶつとりと縁が切れしてしまう。

仲が良いつもりでもそれは私だけだ。相手は何も思っていない。

見せ合った教科書の隅っこにこそそそと落書きをして笑ったのも、一緒に焼却炉までゴミを捨てに行ったのも、私が勝手に大切な思い出だと思っていただけ。遠野にとってはそんなのなんでもなかった。私知らないだけで他の子とも同じような思い出はあったのかも。

もしかしたら私知らない遠野の引越し先を教えてくださいました子供だっていたのかも知れない。だって遠野は私だけじゃなく、みんなに優しくかった。

みんなの知る笹岡真美は、遠野がいなくなつてからの私だ。だけど遠野がいた頃だってそう大きく私が違っていたわけじゃない。いるんなことが中途半端で要領が悪くて、真面目なくせに出来が悪い、ちよつとぼんやりした子供。

遠野は知っている。私を、笹岡真美を知っている。

私は校門前に遠野を置き去りにして走って逃げた。

終わりだ。

制服のままベッドに頭を突っ込んだ。

胸が痛い。

あっさりと終わってしまった初恋の相手に会えたのに、甘酸っぱい物なんて何も無い。ただただ苦しいだけだ。

誰も私のことを知らない新天地で私は田口真美として生きていくはずだったのに。

ちゃんとあだ名で呼び合う友達がいる、内容のないメールのやりとりをして、放課後にはお茶を飲んだり遊びに行ったりできる、そういうふつうの子になるはずだったのに。

遠野は私を知っている。

私が何もできない子だったのを知っている。

バラされたら終わりだ。

引越してきたばかりでまた引越なんてそんなのお母さんをお願いできない。お祖父ちゃんの家は学区が一緒だ。違う学校へ通うこともできない。

私は変わらない。

古い私を捨てて、新しい私になるはずだったのに。

たった一人のせいで私は私の望む私に変わらない。

こんな状況じゃなければ、私が変われた後だったなら再会を喜べたかもしれないのに。

苦しくて苦しくて泣きながら寝てしまった。

遅くに帰ってきたお母さんに起こしてもらったおかげで、お風呂に入らないだとかしわしわの制服で登校、なんてことにはならず済んだ。

だけど学校に行くのがいやだ。

お母さんの方が家を出るのが早いんだし、いっそサボっちゃおうか、とも思うけど転校した翌日から学校に行かなくなったりしたら

お母さんに連絡がいくだろう。そしたらお母さんは仕事どころじゃなくなる。

お母さんに迷惑はかけられない。

その一心でのろのろと足を動かして学校へ向かう。

「真美、おはよー！」

「あ、おはよ、さやちゃん」

笑顔、笑顔。

一緒にカラオケに行った子だ。確か桑原青花。

記憶は正しかったらしく、さやちゃんこと桑原清香はにっこり笑ってくれる。

「真美、名前覚えるの早いねえ。記憶力いい？」

「どうだろ。英単語とかは全然だよ」

「マジで？ 英語の菊池、毎時間小テストやるよ」

「うそー。それヤバイ」

大丈夫。

軽い会話を交わしながら自分にそつ言い聞かせる。

大丈夫。私は大丈夫。だってほら、桑原さんとはちゃんと話せるじゃないか。

教室に入る。

「おはよう！」

「おっはよー」

カラオケの力つてすごい。昨日初めて顔を合わせたはずの人たちと、もうこんなにも友達っぽく交流できてる。

男子とだって平気。

ほら、大丈夫なんだよ。

「うす」

「あ、オカケン、おはよ」

教室の入り口に背を向けていたから声しか聞こえなかったけど、途端に背中が強ばった。

「おはよう、田口」

「おはよう、オカケン」

ことさらに『田口』に力が入った言い方をされたような気がする。挨拶を返した私の顔はひきつっていかなかっただろうか。

「オカケン、なんで真美じゃないの」

「理由はないけど」

素っ気なく言いながらオカケンはカバンを机の横に引っかけると、私に胡散臭い笑顔を向けた。

「田口、職員室付き合って」

「え……」

「今日日直だから日誌取ってこないと」

「なんで私」

「あんた、隣じゃん、俺の」

確かに席は隣だけど、転校二日目の人間に日直をやらせる？

「ほら。こういうことは率先してやったほうが早く学校に慣れるぜ」
手首を掴まれて、思わずびくんと体が反応したけど誰も何も言わない。

男女仲がいいクラスは手を繋ぐくらいのこととはどうやら日常茶飯事のようにだ。

屠殺場に連れて行かれる子牛の気分でオカケンに引っ張られて廊下を歩く。

「なあ」

「……なんでしよう」

「俺のこと、思い出した？」

思い出したから逃げたんだよ。そんなの分かるでしょう。

「びっくりしたよ。昨日」

でしょうね。遠野が覚えている笹岡真美とは別人のはずだから。少なくとも私はそう行動したつもりだったんだから。

「見た瞬間、笹岡だ、ってわかった。けどやたらにこにこしてるし、名前も田口って言うし、他人のそら似なのかと一日中観察した。カラオケにまで行くって言うから、そういうタイプだったっけ、っ

て。あんた、音楽の時間に歌うのもすっぱー声小さかったし」

だって音痴だもの。大きな声でなんて歌えない。

音痴がバレにくい歌を覚えたりしたからカラオケにだって行けるだろう、と考えただけだ。

「だけどみんな帰って、それからほっとしたように疲れたように肩から力を抜いただろ。それ見てやっぱりそうだ、って確信した。やつぱりこいつ笹岡だって。じゃあなんで名前が違うんだろう、って」「名前が違うのはあんたもじゃないの」

私が知ってるこの男は『オカケン』なんて名前じゃなかった。みんなから遠野、遠野くん、って呼ばれてた、やんちゃだけど優しい男の子だった。

こんな目つきの悪い陰険そうな顔をしたメガネ男子じゃなかった。「おふくろが再婚してさ」

「……へ？」

遠野　　じゃないや、オカケンは前を向いたまま言った。

「俺、転校したじゃん。あのおふくろが再婚したんだよ。付き合ってた人が転勤することになってそれでプロポーズされた、って」「え？　え？」

なに、それ。じゃあ遠野ってあの頃。

「うち、母子家庭だったんだ。で、まあ、新しいお父さんってのができて、俺の名前も岡島謙一に変わることになったわけ。思い返してもあんたの家がうちと同じだった記憶は無いから、じゃあ笹岡ん家は」

「親が離婚した」

「うちと逆なわけね」

私が両親の離婚で名前が変わったように、遠野も親の都合で名前が変わったのだ。

「まあそんなわけでき、言いくかつたんだよ」

「何を？」

「引っ越し先とか」

「は？」

職員室の前までやってくるとオカケンは私の手を離した。開けっ放しになっているドアをそれでもノックして、つつれーしゃーす、とか言っつてずかずかと中へ入っていく。

「田口」

手招きをするので仕方なく私もそこまで行く。

「ここ、椎名の机な。椎名は担任な」

「担任の先生の名前くらい覚えてる」

「で、日直は朝ここにおいてあるはずの日誌を持って行く」

「はずって？」

「椎名がサボってたら無いこともある」

「そのときはどうするの？」

「朝のホームルームに来る椎名を捕まえて日誌催促だな」

オカケンは日誌を持つと、っしたー、と職員室を出た。

「私、来なくてもよかつたんじゃ……」

「そりゃ日直のうち一人が来れば済むことだけど、椎名の机覚えな
いと困るだろ。ずっと俺と日直ってわけじゃないんだし」

それもそうだ。

ただ気まずい。

「あの……、あのさ」

「ん？」

「私、あんたと知り合いじゃないことにしたいんだけど」

オカケンの足が止まった。

「なんで？」

なんで、って。

だって逆戻りしたくないんだもの。

あの頃の、遠野が知ってるはずの私に戻りたくないんだもの。

私、昨日楽しかった。

友達になつてくれそうな人がたくさんいて嬉しかった。

転校先の様子なんてわからないからもしかしたら意地悪な人がい

たりするかも、ってどきどきもしたけど、みんな優しかった。

だから私はここにとけ込みたい。

前みたいにお荷物のようにお邪魔虫のようにのけ者にされたりせずに、昨日みたいにみんなと一緒に笑える私になりたい。

そのためには、昔の私を知ってる遠野は邪魔だ。

「俺はむしろ言っちゃいたいんだけど？」

オカケンが振り向く。

ばさばさと落ちていた前髪をぎゅっと上に持ち上げて、メガネの向こうから睨んでくる。なのに。

なんで口元は笑ってるんだ。

「あの後、俺すごく後悔したんだよね。なんで言えなかったんだろう、って」

「な、何を」

「引っ越すこと。名前が変わること。引っ越し先。その全部をどうして言えなかったんだろう、って」

オカケンの手がまた私の手を掴む。

「多分俺が全部を理解してなかったから説明ができなかったんだ。いまなら簡単に言える。さっきだってそうだっただろ。おふくろの再婚と再婚相手の転勤が同時期だったんだ、って。それであんたも理解できるだろ。だけど小学生の俺にはその説明ができなかったし、あんたに理解してもらえとも思ってた。なにより俺がいっぱいいっぱいだった。だけど、連絡もできないくらい遠く離れてから、どうしてせめて引っ越し先くらい伝えておかなかったんだろう、って何度も後悔した。おふくろは同じクラスの保護者って言ったって男子の親とばかりつるんでたそうだから、どうしたって笹岡の親とは連絡取れない。俺自身、笹岡の家の電話番号なんか知らないし住所だって気にしたこともなかった。だからどうにもならなくなっ

てから初めて後悔した」

「あの、遠野……」

また遠野と呼んでしまって、舌打ちしそうになった。

「ごめん。オカケン」

「どっちでも俺だけど、どうせなら謙一って呼ばない？」

「は……？」

「知り合いであることを隠したい、ってことはあんたは昨日のアレを自分だ、って押し通したいわけだよな？ つまり笹岡だった自分のことは隠したい、と。でも俺は昨日見たあんたも嫌いじゃないし、笹岡だったあんたも嫌いじゃない。だから 真美」

間をおいて甘く名前を呼ばれてぞくりとした。握られてる手を指の腹で撫でられてまたぞくりとした。

私の知ってる遠野じゃない。

そりゃそうだ。だって目の前にいるのは小学四年生の遠野謙一じゃない。中学二年生の岡島謙一だ。

「お互い親の都合で振り回される子供でしか無いのに、こうやってまた会えるなんてなにかしら運命を感じない？」

「か、感じない……」

感じちゃだめだ。

考える。考えるんだ。

「感じてほしいなあ。隠しておきたいんでしょう？」

「それは脅しか！」

オカケンは私の叫びに、それはそれは甘ったるい笑顔を返してきた。

「脅しても何でもいいよ。もう二度と会えないって諦めてた初恋の子に会えたんだから俺はこのチャンス逃がさない。バラされたくなかったら俺を謙一って呼んでよ」

ぱかん、と口が開いてしまった。

なに？ いまこの人、何を言った？

「ねえ、俺も真美って呼ぶし。田口でも笹岡でもどっちでもいいよ。真美だもんな。でもあんた、いつも教室の端っこでおとなしくしてたのをバラされたくないんだろ？ 花壇の水やり当番、いっつも押しつけられてたのバラされたくないんだろ？ 俺、そういうあんた

好きだけど、あんたは昨日みたいな明るい元気な子って思われたい
んだろ？ だったら黙っててやる。だから」

腕をぐっと引かれた。

距離が近くなる。

校内なのに！ 職員室、すぐそこなのに！

すごく追いつめられた感じがするのに！

私は変われる。

昔の私を知っているその人の前で、こうなろうと思った私とはち

よっと違うみたいだけど、新しい私になれる。

私はどきどきしながら彼の名前を呼んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9088y/>

誰も知らない新しい私

2011年11月27日06時04分発行